

短大生の住意識についての研究

—ルームシェアの課題提出物の分析から—

A study on the Residential Consciousness of Junior College Students

— From an Analysis of the Submission Differences of Students who Room Share —

浅見 美穂

(Miho ASAMI)

キーワード：住意識、空間構成、ライフスタイル

Key Words : Consciousness on Living, Space Composition, Life Style

I. はじめに

家族の縮小化やライフスタイルの多様化などを背景に、現代の特に都市部に暮らす人々の居住形態には様々な形がある。そのような中で、ひとつの住居を親族関係や恋愛関係にない他人同士が、シェア（空間、費用を共有）して居住する新しい住まい方として「ルームシェア」が注目されており、近年テレビ番組や雑誌で紹介される機会も増えている。家賃や光熱費などの住居費が節約できる、ルームメイトがいることで寂しくなく安心、異文化交流（語学学習）や異業種交流のためなど様々な目的により、学生や社会人の中で若年期の一時期のおしゃれな住まい方として取り上げられ、トレンドを形成しているといっても良いほどである。

一方で、人口減少に伴う住宅ストックの増大の背景から、その活用的手段としても、地域コミュニティ側からシェア居住への期待も高まっている。ルームシェア可の賃貸物件は増加しており、独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）では、ハウスシェアリング制度を平成16年より導入し¹⁾、一人暮らしに不安を抱える高齢者や、親の仕送りに頼れない学生、都心の高額物件への入居を夢見る社会人などの様々なニーズに応じている。しかし、他人同士が住むことから起こるトラブルや、建物上の法的な問題を有するなど、継続居住に課題も多い。

短大生は2年間の学生生活の中で、『生活全般に関する事柄について、基礎となる知識を身につけ、問題を適切に判断する』『社会や家族のために修得した知識を活用し、健康で快適な生活を創造する』²⁾ ことができるように学び、卒業後、自律できる準備をする必要がある。それには自活するための就労とともに、毎日の衣・食を支える住居が必要であり、生活の維持管理のための家事や、さらに余暇時間の過ごし方や周囲の人々との関係性、地域コミュニティの中での責任などを体験することは必要であろう。シェアハウスの検討は、親元での生活では見えてこない様々な問題に直面するためのシミュレーションに適していると考えられる。

あさみみほ：生活科学科特任教授

食物や被服と異なり、住まいは試しに購入・制作するには高額でリスクも高く、若年期ではその経験も乏しい。住まいの選択を誤ると人生設計への影響も過大であり、当学科のインテリア関連授業では、住に関する具体例を通しての疑似体験を多く積み重ねることにより、快適な住空間への視点を持ち、賢い住まい手になるための知識や手法を習得させたいと考えている。

そこで本稿では、生活科学科「リビングデザイン論」の、学生の卒業後の住まい方として、友人3人での暮らしを想定、計画する授業の課題提出物の分析を通して、短大生の生活観や住居観をひも解き、今後の若い世代が住まいに求める居住形態を探ることを目的とする。

II. 研究の概要

研究対象と方法は以下のとおりである。

研究対象：生活科学科『リビングデザイン論』2013年度履修者36名、2014年度履修者25名、計61名
 研究方法：最終課題「友達3人のルームシェア」の提出物「ワークシート」の記述と「計画平面図」の分析
 実施時期：2013年7月、2014年7月

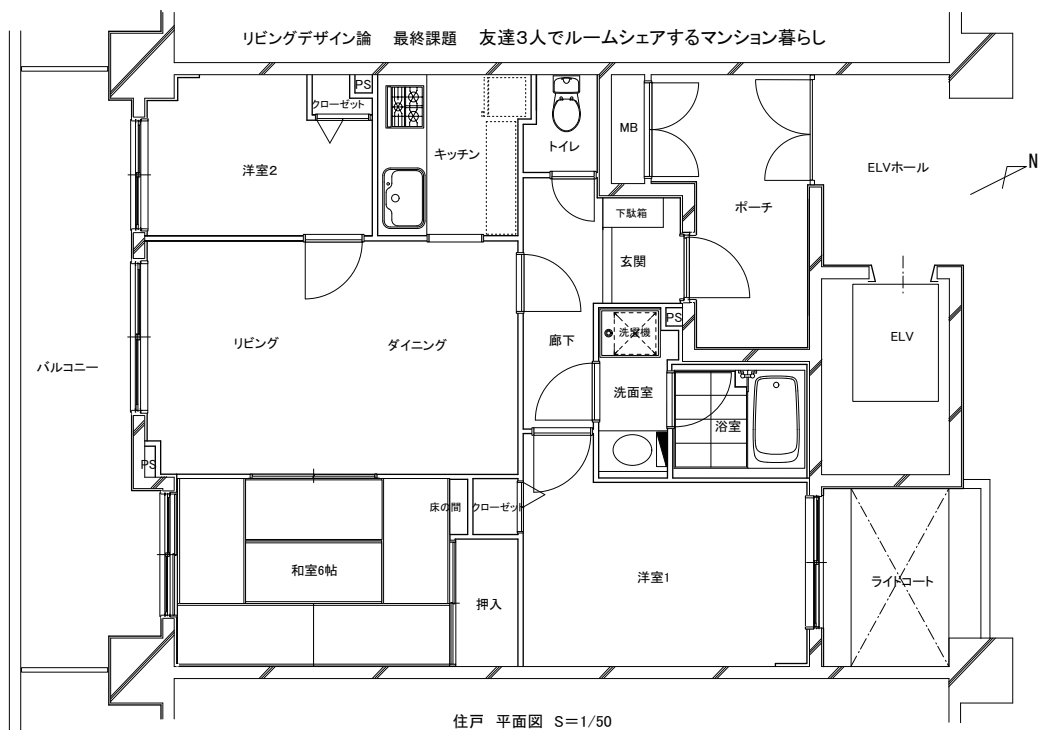


図1 課題の集合住宅の一住戸プラン

対象とする課題は、想定上の集合住宅の一住戸（図1）において、25歳のあなた（私）と友人2人とでの暮らしから、これまでの授業で学んだ内容や集合住宅の特質を理解した上で、快適で魅力的な住まいをデザインする内容である。ワークシートに、暮らしの前提条件や主旨を整理して書いた（図2）上で、次の点に注意して計画平面図を作成する。

- ① 縮尺 1/50 （グリット線は30cm相当のマス目）
- ② 玄関・トイレ・浴室は既存のままとする。
- ③ 私・友人A・友人Bのための3つの個室とキッチン・ダイニング・リビング・洗面・洗濯機スペースをレイアウトし、合わせて各部屋に必要な家具や収納を画く。

なお、課題提出物は成績付け終了後に、学籍番号と氏名を切り取り順不同にファイリングしたものを取り扱い、学生の個人が特定されないよう配慮をしている。また、学生には課題提示

リビングデザイン論
最終課題

友達3人のルームシェア 学籍番号 名前
共同住宅の住まいを理解して暮らしをデザイン

○この家で一緒に暮らす3人のライフスタイルを想定して下さい				
	私との関係	年齢	仕事	趣味・その他
私		25歳	コーディネーター	カフェ巡り
友人A	部活仲間	25歳	保育士	音楽演奏
友人B	高校の同級生	25歳	アパレル	泳ぐこと

○この家で暮らす3人のルールは？費用の分担は？

ルール
一、男をいれない！
一、貯金には何があっても手を出さない！
一、生活費は決まった日に必ず出す！

費用の分担
全員(3人)で割り勘する。
※ 使わずに場合 最低500円貯金する。

○生活動線で工夫した点は？（キッチン・リビングの位置、水回りの位置）

生活の半分以上がリビングでできるようにした。
料理と作。たらずにテーブルに運べるような動きを少なくする工夫をした。

○採光・防音など室内環境で工夫した点は？

採光は...カーテン 防音は...カーペット
西の部屋は、夕方の西日が強いため、冬はカーペットを敷いて防寒効果がある。
採光できるカーテンを使用。 夏は毛のものを暑いため、タイル系の防音できるものを敷く。

○各自の部屋のプライバシーは？（玄関からの動線は？リビングとの関係は？）

一人一人の収納スペースを広くし、クローゼットはウォークインクローゼットにした。
リビングから自分の部屋になるべくスムーズに行けるような配置を考えた。

○集まって住む利点は？ また不都合は？

・個人の自由が許されるが、決まり事を守る習慣が身に付く。
・3人でお金の管理など、3人で話し合う場が設けられる → お互いの意見を話し合える！
・リビングなどの共有スペースは、一人一人の個性を主張しづらいので、皆でまとめた意見を求められる。

○この家で3人の生活の変化が起きたらどうする？（結婚・転職・病気...）

結婚 → 一緒に暮らすことになる。2人結婚したら、家を売る。
転職 → 見送る。2人転職したら、家と家を売ってバラバラに過ごす。
病気 → 一人が戻ってくるまで家(部屋)はそのまましておく。

金において話し合えて決定する!!

○このマンションの他の住民や、周辺地域のために3人ができることは？

・マンションなので、なるべく静かに暮らす
・住民には挨拶、良い顔を忘れないようにすること、暮らしやす、環境を作るモットー!!
・地域のボランティアお祭りなどには、時間があれば参加。仕事は優先!

○この住まいの魅力・暮らし方のアピールポイントは？

3人が過ごしやすい空間をコンセプトに、どの部屋にも光を取り入れられることがポイント

図2 ワークシート記載例

の際に、提出物は研究として使用する主旨の断り文を入れている。

Ⅲ. 分析結果

1. 学生の指向するライフスタイル

ワークシートでは最初に、この家で一緒に暮らす3人のライフスタイルを想定させている。

25歳の私と友人A, 友人Bを思い描くことで、短大生の卒業後、自分がどのようになりたいと考えているかを垣間見ることができる。

まず私と友人A, 友人Bの3人の関係であるが、『友人』以外の明確な記述のある学生(n=40)のうち17人(42%)が高校時代の友人、14人(36%)が中学校・小学校・幼なじみの友人であり、大学や職場での友人を想定している学生は8人(20%)である。一緒に暮らす人を、つきあいの浅い友人や未知な人を想定するのは難しいためであろうが、内向指向であると捉えることもできる。

3人(25歳の私と友人2人)の仕事には、多様な職業や働き方の記述がある。自由記述のため表現は様々であるが、総記述数(n=176個)の中で『OL・事務・会社員』が51人(29%)、『アパレル(関係)』が19人(11%)、『販売・販売員』が13人(7%)、『保育士』が11人(6%)、『美容師・美容系』が7人(4%)、などで57%である。その他では看護師、公務員、インテリアコーディネーター、調理師、ブライダル、デザイナー、編集者、トリマー、介護士なども数人ずつの記述があり、短大生が25歳の時にはこれらの具体的な仕事に就いていたい、また一緒に住む友人にはこれらのような仕事をしてほしい、という職業意識があることがうかがえる。一方で『フリーター・バイト』も10人(5.7%)、『学生』も4人(2.3%)ある。また、私と友人の仕事で特徴的な違いは見られず、一緒に住む友人3人共が全て同じ仕事であるという想定は5人だけである。

3人(25歳の私と友人2人)の趣味も、様々な記述がある。総記述数(n=166)の中で『買い物・ショッピング』が21人(13%)、『スポーツ(観戦)』が15人(9%)、『音楽鑑賞』『読書』『料理』が共に13人(8%)ずつ、『DVD鑑賞・TV』が11(7%)、『カラオケ・歌う』が8(5%)、などが上位を占める。その他では、おしゃれ、旅行、パソコン、ドライブ、手芸、絵を描くも数人ずつの記述がある。なお、『料理』が私の趣味なのは13人中2人だけで、友人の趣味だという想定が大多数であるのが特徴的である。その他の趣味については、私と友人との明確な違いは見られず、一緒に住む友人3人共が全て同じ趣味という想定はない。仲の良い友人とはいえ、それぞれの個性があり、違うライフスタイルを想定している。

以上のことから、学生たちが描いた一緒に住む3人の暮らしの想定としては、小中・高校時代からの気心の知れた仲間同志で、それぞれ別々の職場で働き、休日には連れだってショッピングやカラオケに出かけることもあるが、一人で室内にてDVD鑑賞や読書をすることもあり、またそれぞれ別の友人とスポーツをしたりドライブに行くこともある、というようなライフスタイルが平均像であるといえよう。

2. ルームシェアへの意識

学生たちはルームシェアについて、どのような意識を持っているのか。他人同志が集まって住む利点と、その反対に不都合はどんなことがあるか、生活を始める前に想像してみることが必要である。そこから、暮らしの上でのルールを決めることの重要性に気づき始めている。

集まって住むことの利点としては計86のコメント（複数回答あり）がある（図3）。61人中29人が『楽しく、にぎやかな暮らし、話し相手がいる』という、友人とのコミュニケーションに基づくコメントである。また27人が、『家賃や生活費を割り勘にできて経済的』であることをあげている。その他、誰かがいることで『寂しくない・一人じゃない・安心』と肯定的である。さらに言葉を添えて『決まり事を守る習慣が身につく』『それぞれの得意なことで協力できる』『将来家庭を持ったときに役立つ』『部屋だけでなく洋服や物もシェアできる』『友情が深まる』など、より積極的にルームシェアを捉える学生もいる。また料理や掃除、洗濯などの『家事の負担が減る』ことの期待もある。既に親元を離れて寮生活や一人暮らしをしている学生は、61人中7人いるが、親と同居の暮らしから独立することは、一人で寂しく話し相手に不自由し、お金のやりくりが大変で家事が重荷であると想像し、ルームシェアすることでそれらを補うことができると感じている。家事の中でも特に料理については『料理の得意な友人が作ってくれる』という記述が3人にあり、自分で料理することには苦手意識があることがうかがえる。

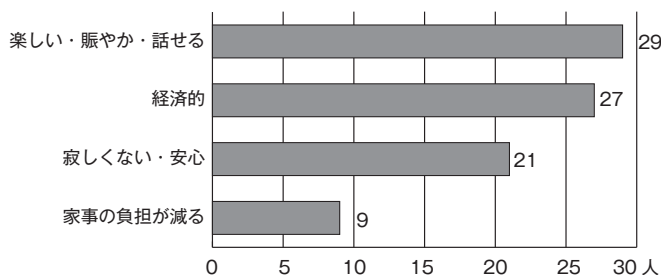


図3 集まって住むことの利点 (n=86)

他人同士が一緒に住むことでの不都合な点としては計64のコメント（複数回答あり）がある（図4）。『トラブルや喧嘩』への懸念が最も多く17人が挙げている。利点である『一人じゃない』の裏返しである『一人になれない』ことへの不満、自由に振る舞えないことで我慢をしなくてはならないことを挙げている。水廻りの利用や部屋の狭さなど空間的制約よりも、人間関係から来る不都合や時間的制約が上位になっている。想像されるトラブルとしては『電気代など一人に使い過ぎ』『家事のやり方や常識・こだわりの違い』『物を壊されたり盗まれたり』『夜の物音・気配』『彼氏の連れ込み』など具体的な例を指摘する学生もいる。これらの不都合は、家族との暮らしでも起こり得ることであるが、他人同士が故に深刻化する恐れもあり、『一緒に住むと友人の悪いところが見えてくる』との記述もある。

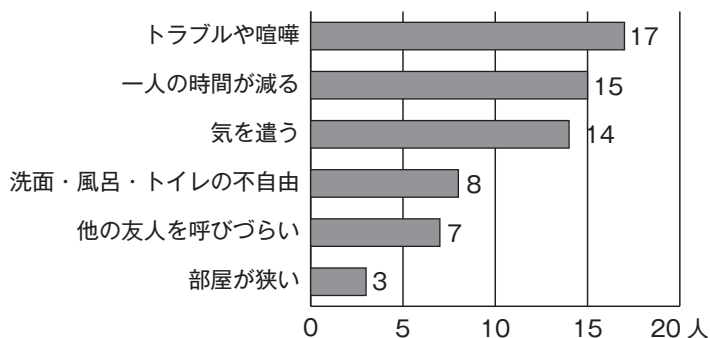


図4 集まって住むことの不都合な点 (n=64)

以上の利点・不都合を洗い出した後に、学生が考えた集まって住むことのルールについての記述を分析する。お金に関するルールは、61人中60人が言及している。家賃や光熱費は『今月收入が多かった人が払う』という無計画な回答の一人を除いて、ほとんどの学生が『3人で割る・割り勘』を大前提としている。食費については『一日1000円で』『毎月3人が決まった額を貯金箱に入れておき、一食500円で当番の人が貯金箱から出して買い物に行く』という細かいルールや、『無駄使いをしない・節約』などを掲げている学生もいる。お金に関するトラブルのリスクを予想した結果であると思われる。

家事については、『日替わりで』『曜日毎に』『ローテーションで』『当番制で』など役割を決めることを、料理について28人、掃除・ゴミ出しについて28人、洗濯について16人が記述している。『臨機応変に』『家にいる人が率先してやる』『気がついたら』などの各自の自主性に委ねるは各一人の記述である。

各々の家族や他の友人、男性を家に呼ぶときのルールとしては、12人に記述があり、『友人や彼氏を呼ぶときはあらかじめ話しておく』『勝手に連れ込まない』などの決まり事を考えている。

その他に『外食するときは連絡する』『週1でミーティングをする』『その日の予定をホワイトボードに書いてから出かける』など、共同生活がうまく機能するような仕組みを掲げる一方、『個人の部屋に入らない』『人の物を勝手に使わない』『自分のことは自分でする』『お互いの邪魔はしない』など個人の生活を尊重することを気遣ったルールも考えられている。

3. パブリック空間とプライベート空間の捉え方

(1) 空間構成

住まいのプランを計画する上で、「動線」一人の動く軌跡や「採光」—太陽の光の取り込み、「換気」などは重要な要素であることを、学生たちは当該授業の中で既に学習し課題に取り組んでいる。今回の課題である住まいの形式は集合住宅であるため、構造躯体、バルコニー、玄関ドアや外部に面する窓は位置を変えることができない想定としている。また浴室とトイレの

位置は変えずに計画を考える設定とした。そのため、学生たちがこのルームシェアでどう暮らしたいかは、3人みんなが使うパブリック空間（LDK=リビング・ダイニング・キッチン）と3つの各々の個室をどのようにレイアウトするか表現されている。

学生の考えたプランを動線と採光の視点から、その考え方の傾向を分析するとタイプⅠからタイプⅤまで5つに分類できる（図5）。

まず動線では、玄関から入って、リビングを経由しないと個室に行けない部屋が1つ以上ある「リビングアクセス型」（タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲ）と、玄関から廊下を経由してからLDKにも各個室にも行く「中廊下型」（タイプⅣ、Ⅴ）と大きく分類することができる。リビングアクセス型が61人中43人（70%）で多く、『廊下をなくして広く』『みんなが集まりやすく』『リビングに繋がるように』『玄関を入ったらすぐ全部見えるように』などのコメントからも、共有の場としてリビングの求心性を意図した空間構成である。反対に「中廊下型」は61人中18人（30%）であり、『リビングを通らなくても自分の部屋に行ける』『帰りが遅いときには友人に迷惑をかけないように』『各自の部屋をリビングから少し距離を置いて』などのコメントどおり、LDKと個室の間に廊下を挟むことによって、個室のプライバシーをより重視した構成になっている。

採光の考え方では、LDK・各個室全てに窓を配置した「全室有窓型」（タイプⅠ、Ⅳ）と、パブリック空間とバルコニーの関係を重視した「LDK-B型」（タイプⅡ、Ⅴ）、玄関との関係を重視した「LDK-E型」（タイプⅢ）の3つに分類できる。「全室有窓型」は49人（80%）と最も多い。どの部屋にも窓があるために建築基準法上合法的になり得るが、リビングを大きなまとまった空間にできないため、家具のレイアウトなど工夫することが求められる。「LDK-B型」は9人（15%）で、LDKとバルコニーとを一体として、広々とした使い方の可能性を示している反面、個室1つが無窓居室³⁾になっている。この場合には、無窓居室に欄間を設けて光を取り入れる、リビングと引き戸で仕切って一体に採光を考える、夜間勤務の友人の部屋に当てる、など対処方法が考えられている。「LDK-E型」は3人（5%）で、エントランス側にリビング、住戸の奥になる窓際に各個室の配置している。このレイアウトは一戸建て住宅ではプランニングの定石であるが、集合住宅の本課題のプランでは、LDKが外気に接しない形となる。その反面、個室は3室とも比較的広く確保でき、充実したプライベート空間が創造できている。

Ⅰ型・Ⅲ型・Ⅳ型の例を図6・7・8に示す。全体では、リビングアクセスで全室有窓プラン（Ⅰ型）が、既存のプランがこの形であったこともあり、35人（57%）と過半を占めている。Ⅰ型の中にも、リビングアクセスが1室か2～3室の場合、またキッチンを独立するかダイニングと一体にする場合など、プランの考え方は何通りにもなる。他人同士の暮らしの中で何を重視するかによって様々なプランが考案され、学生それぞれのライフスタイルの優先順位と空間構成での工夫が見られる。

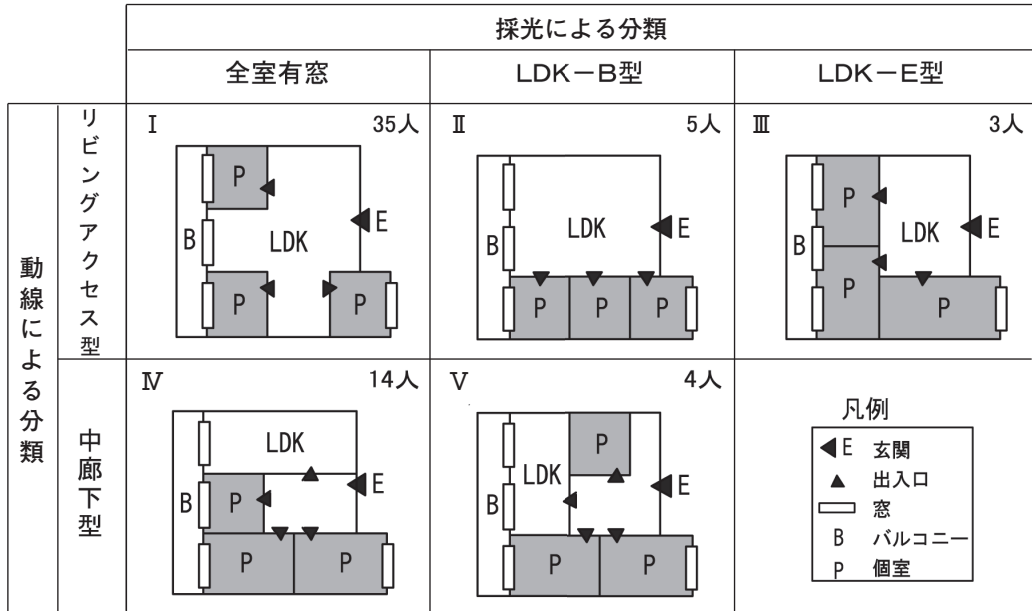


図5 プランニングの分類

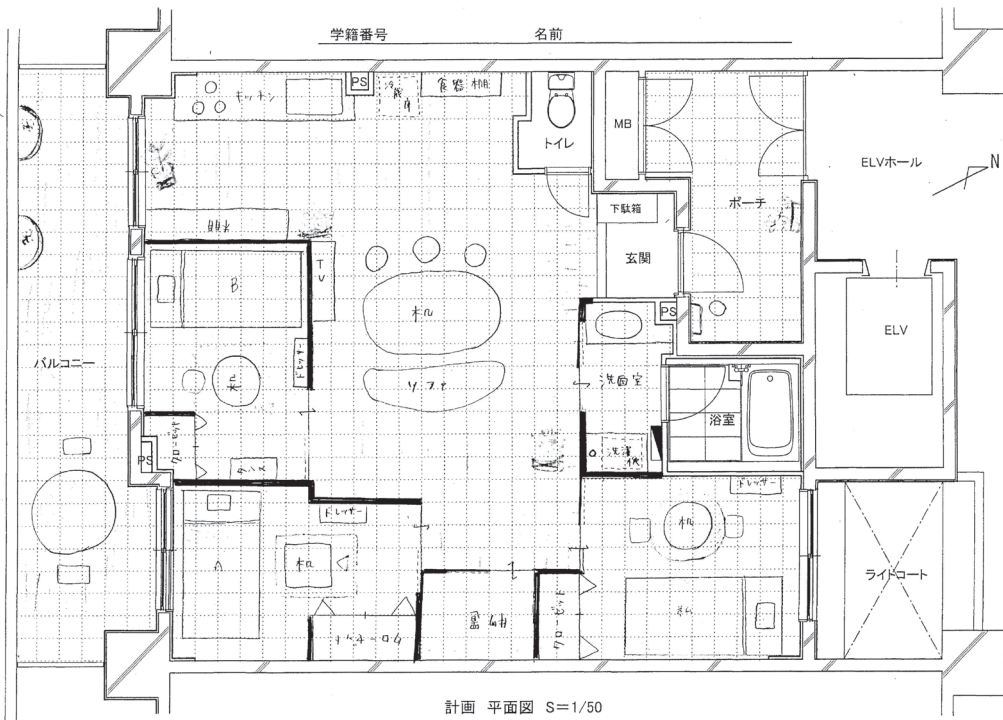


図6 プランニングの例 (I型)

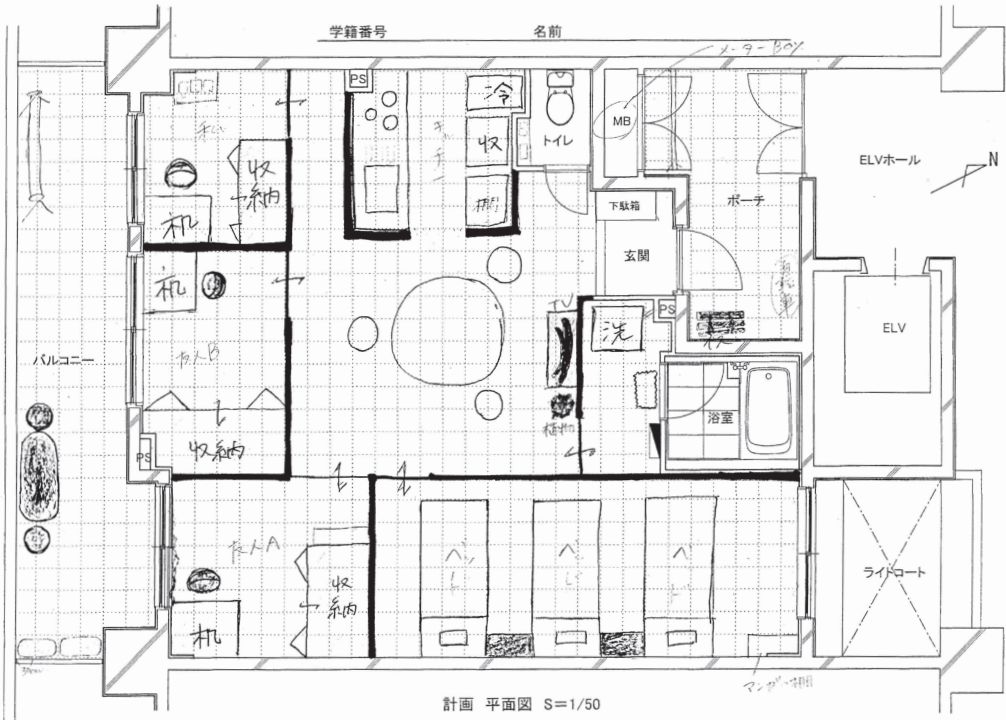


図7 プランニングの例 (Ⅲ型)

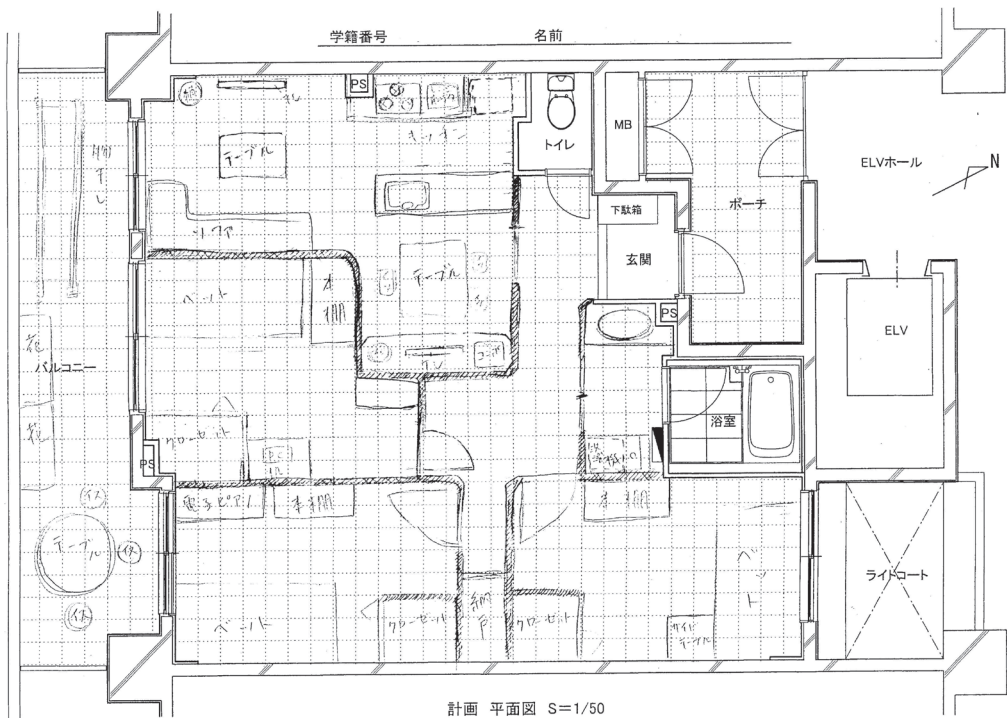


図8 プランニングの例 (Ⅳ型)

(2) 各部屋の面積配分

学生の考えた各プランのパブリック空間とプライベート空間の面積配分から、学生たちのルームシェア居住における適切な公私の捉え方を探る（表1）。

個室は最小5.03㎡（約3畳）から最大14.87㎡（約9畳）まであり、平均は8.84㎡（約5.5畳）である。なお最小の例は、個室は机とベッドの置ける広さのみとして、別室に共同のクローゼットを設けている。3室の広さをほぼ均等にするにこだわった例も多く、21例（51%）は3室の面積の標準偏差が1.0以下である。LDKの面積は、最小14.4㎡（約8.5畳）から最大33.21㎡（約20畳）まであり、平均は18.73㎡（約11畳）である。なおこの数値には廊下として仕切られた部分は含んでいない。

これらの数値から、パブリック空間/プライベート空間（個室3室の合計）の面積比率を算出すると、最小34%から最大200%となり、61人の平均値は75%である。パブリック空間/プライベート空間（個室1室）の面積比率では、最小101%から最大600%となり、61人の平均値は224%である。すなわちLDKの広さは、個室1室面積の約2.2倍の広さは確保したいという結果となる。

表1 各部屋の面積と公/個比率

	個室面積	個室面積合計	LDK面積合計	公/個室合計 面積比率	公/個 面積比率
最小	5.04 (㎡)	16.2 (㎡)	14.4 (㎡)	34%	101%
最大	14.87 (㎡)	36.18 (㎡)	33.21 (㎡)	200%	600%
平均	8.84 (㎡)	26.52 (㎡)	18.73 (㎡)	75%	224%
標準偏差	1.12	3.99	3.86	0.3	0.91

4. 地域環境や将来の変化への意識

3人がルームシェアをおこなう住まいは、一戸建ての住宅ではなく5階建ての共同住宅の3階に位置する想定である。集まって住むという点では、共同住宅内の他の住戸の居住者への視点も忘れてはならない。「このマンションの他の住民や、周辺地域のために3人ができることは？」の問いに対する記述は61人全員にあり、複数回答の結果を図9に示す。

学生たちは、3人の生活は楽しくにぎやかな暮らしになると想像し、それが度を過ぎると近所迷惑になるであろうと気にしている。また想定した住戸はエレベータに近い位置なので、階段やエントランス部分など共用部の清掃にも目が行ったようである。さらに地域のボランティア活動に参加、ゴミ掃除や防犯対策などの地域活動にも積極的に参加したいという記述もある。また、交流・手伝いでは、『月に一回隣人を呼んでパーティを開催する』『お年寄りや子育ての手伝いをする』『マンションの理事会に参加して情報を得る』『バザーなどをして楽しくつきあいたい』などかなり具体的かつ積極的な関わり方を提案している学生もいる。

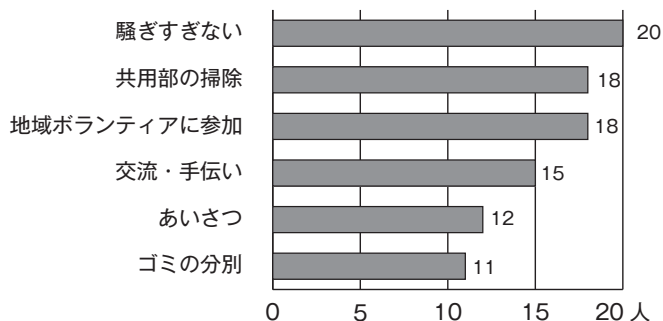


図9 周辺地域のためにできること (n=94)

これまで、友人とのルームシェアをいかに住みこなすかを学生と共に考えてきたが、ここでは将来の暮らしの変化について考察する。「この家で3人の生活に変化が起きたらどうする？(結婚・転職・病気…)」の問いに対する学生のコメントを分析する。

25歳といえば、3人のうちの誰かの結婚は、ルームシェアにとって大きな変化をもたらすきっかけになる。一人が結婚して出て行ったら二人では気まずい、または経済的に無理という理由から即『解散・引っ越し』となるのは61人中11人で、『話し合う(5人)』『一人抜けても二人で住む(11人)』『次に一緒に住む人を募集する(9人)』『そのときのためにお金を貯めて、また引っ越す(1人)』『いずれ3人の内の誰かが住めば良い(1人)』など、住み続けることに前向きな考えが多い。

IV. 今後のルームシェアへの動向

最後に、授業の最終課題を離れて、改めてルームシェアを自分自身の問題として考えてみたときに、現実的な学生の本音を問うた結果を示す(図10)。(2014年履修者のうちn=25人)

「ルームシェアに興味がありますか？」では『はい』が過半を占めていたものの、「卒業後、実際にルームシェアをしようと思いますか？」では少数派になっている。一緒に住む利点は多いものの、考えられる不都合、不自由、トラブルなどのリスクを懸念した結果が現れている。一方で、『既に従姉妹と計画巾である』『すごく仲良しだったらできそう』『外国人と住んでみたい』など、本課題のシミュレーションにより他人と住むことに自信を付けて、住まい方の選択肢が広がった学生も出てきている。

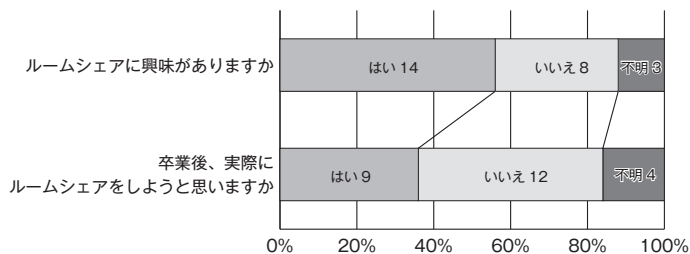


図10 学生のルームシェアへの本音 (n=25)

V. まとめ

以上のように、卒業後ルームシェアでの住まい方を想定し、住まいのプランニングをおこなう課題を通して、短大生たちはかなり具体的に今後の生活設計を想像することができたと言えるであろう。ワークシートからは、彼女たちのライフスタイルや趣向を垣間見ることができた。25歳という遠くない将来という設定も功を奏しているかもしれない。プランニングでは、スケール感覚は乏しく作図能力には欠けるものの、各生活行為ごとに必要な家具や物があることに気づき、部屋を区切り、その中に必要なレイアウトをおこなうことができている。

祖父母や叔父叔母、使用人も同居していた昭和初期の暮らしとは違い、現代の短大生は大半が核家族で兄弟も少なく、地域社会とも希薄な中で、自分だけの個室を持つのが当然の暮らしをしてきているため、住まいの中で人との関係性を学ぶ機会は減っているといえる。ルームシェア居住を考えることは、自分だけのことでなく他人の暮らしも理解し、人への気遣いや人との関係性を学ぶことに他ならない。その学びは短大生にとって、現在の自分の住まい方や家族との関係を再認識することにも繋がったようである。

自立した生活に向けて家族との暮らしを離れた場合、一人暮らしでは寂しいが、何でも話せる気の置けない友人との暮らしなら楽しく賑やかであろう。しかし一方で自分の時間が少なくなり、自由がきかなくなるリスクも伴う。人と人との繋がりや絆を求めている反面、自分のこだわ部分も持ち、他人に干渉され過ぎたくない、気を遣うのは疲れる、などの現代の都会に暮らす若者が持つ、相反する二面性が、今回の課題分析からも表現される結果となった。

これらのことから、今後の住居を考える上で、個々のプライバシーはきちんと守り、その上で人との関係性が築いていけるような、「適切な距離感」が確保されることが必要であることがわかる。パブリック空間とプライベート空間の空間構成をどのような割合で融合させるかという物理的な側面も重要であるが、住み手の生活上のルールや暮らし方の工夫など、個々の住意識にも深く関わることが示唆された。

[注]

- 1) 独立行政法人 都市再生機構 <http://www.ur-net.go.jp/sumai/>
横浜支店 電話によるヒアリング調査2014年9月16日による。
- 2) 目白大学短期大学部生活科学科 ディプロマポリシーからの引用。
- 3) 建築基準法では、居室（人が長い時間過ごすと想定される部屋）には、採光が確保できる窓の面積（＝有効採光面積）を部屋の床面積の1/7以上設けなければならない規定がある。その有効採光面積が確保されない居室を無窓居室という。

[参考文献]

- 1) 北川大祐：住宅ストック活用手段としてのシェア居住，都市住宅学 85号，pp.58～64，2014，SPRING
- 2) 特集/シェアハウス－集まって暮らす試み，TOTO通信 2014年 新春号 第58巻・第1号
- 3) 久保田裕之：他人と暮らす若者たち，集英社新書，2009
- 4) 阿部珠恵，茂原奈央美：シェアハウス わたしたちが他人と住む理由，辰巳出版，2012